博士（保健学）学位論文 要旨

児童生徒の「腹痛」アセスメント手法の開発に関する研究

Studies on the Development of Evaluation
Method of Abdominal Pain
Among Students of the Elementary, Junior High, and High School.

2015 年

1202152

力 丸　真 智 子

RIKIMARU,Machiko

女子栄養大学

【研究の背景】児童生徒は何らかの身体的な苦痛や痛みを訴えて保健室に来室する。養護教諭は限られた時間で的確な判断・対応を行わなければならない。現在、養護教諭は日常の児童生徒の状態をふまえ判断・対応を行っているが、その方法には統一的なものはない。児童生徒の状態を的確に判断・対応するためのアセスメント手法が開発される必要がある。特に保健室来室で多くみられるのは「腹痛」であり、そのアセスメント手法の開発は緊急の課題である。

【目的】本研究は、児童生徒が「腹痛」を訴えて保健室に来た際に、短時間で的確に判断・対応できるアセスメントシートを開発するものである。そして、開発したシートを使ってもらい、その有用性と効果を評価することを目的とした。

【対象及び方法】本研究は 3 章から構成される。第 1 章では、養護教諭アセスメント研究会（YA 研究会）の会員 9 名に QC 手法（Fishbone Diagram：FD の作成）を用いて FD 作成を 3 回繰り返してもらい「腹痛」アセスメントシートの開発を行った（試行版）。同シートは、痛みそのものを評価できる項目とそれに加えて原因等に関する項目から構成される。前者を「痛み」得点とし、後者を「総合」得点として評価できるようにした。「試行版」を評価するために、養護教諭 167 名を対象に集合法により調査を実施した（有効回答 131 名、有効回答率 86.1%）。調査期間は 2014 年 8 月から 12 月である。第 2 章では「試行版」の実施・評価をうけ、相関分析や天井フロア分析等を行い、また YA 研究会における検討をも踏まえて項目の加除・修正を行った（改良版）。この「改良版」を首都圏の公立小・中・高校の養護教諭 9 名に使用してもらった。対象児童生徒は 32 名（小学 7 名、中学 6 名、高校 19 名）である。また、養護教諭に対しては、使用後に同シートの有用性、

必須項目等について半構造化面接を行い、内容分析により評価をした。児童生徒への実施は 2015 年 1 月、面接は同年 2 月に行った。第 3 章は、改良版の評価結果をうけ、「最終版」シートを完成させた。その「最終版」を試行版対象者と改良版対象者に対し、その評価を試みた。比較分析の方法は、「試行版」「改良版」「最終版」とも共通であり、学校間差（小学校対中･高校）の検討と養護教諭の判断・対応の差（帰宅・保健室休養対教室復帰）の検討を行い、養護教諭の経験年数による判断の差の検討及び「最終版」については別対象者での再現性の確認も試みた。

【結果及び考察】第 1 章では、QC 手法による FD 作成の 3 回の繰り返しによって 47 項目からなる「試行版」が作成された。得点化に用いた項目は、「痛み」得点 10 項目、「総合」得点 38 項目である。その評価結果をみると、「痛み」得点では学校間と養護教諭の判断・対応において有意な差が認められた。「総合」得点においては、養護教諭の判断・対応に有意な差がみられた。第 2 章では「試行版」より 11 項目少ない 26 項目からなる「改良版」が作成された。得点化に用いた項目は、評価項目を少なくしたものの「痛み」､「総合」得点と試行版と同様な結果であった。また、半構造化面接の結果、漏れのない丁寧な情報収集ができる、判断の根拠となり連携に活かせるなどの有用性と利点が示された。改善点としては緊急性の判断に最低限のアセスメント項目として自由記載項目も判断に重要であると指摘され「痛みの部位確認図」等の 5 項目の追加がされた。また「体育の有無」「筋肉痛の有無」の削除も指摘された。第 3 章では、29 項目からなる「最終版」が完成された。得点化に用いた項目は、「痛み」得点項目で 5 項目、「総合」得点項目で 19 項目である。「総合」得点は、腹痛の要因となる下位項目の有意性も包含されている項目である。さらには

緊急度優先アセスメント項目が短時間で明確に分かるように色付きで明示しA4版1枚とした。「試行版」実施対象者での評価結果をみると「痛み」得点では、養護教諭の判断・対応では有意な差が認められた。「総合」得点では学校間と養護教諭の判断・対応において有意差がみられた。また、「改良版」実施対象者での評価結果をみると「痛み」「総合」得点とも学校間と養護教諭の判断・対応において有意差がみられた。しかも各シートにおける評価結果の信頼係数（Cronbach's α係数）をみると、試行版「0.57」、改良版「0.64」、最終版「0.69」が得られた。また、再現性の確認のために別対象者における学校種別の養護教諭の判断・対応の評価得点においては、痛み得点、総合得点のいずれにおいても有意な差は認められず、再現性が確認された。しかも、養護教諭の経験年数による差もなかった。以上の結果、「最終版」は発達段階に応じた評価と養護教諭の初期対応への評価において、活用できることを示すものである。しかも、「最終版」は児童生徒の腹痛の緊急性を効率的にアセスメントするための“緊急度判断最低限アセスメント項目”を明示し、A4版1枚に収まる程度に内容精選され、信頼係数は向上し、ほぼ信頼できる値が得られ、再現性が確認され有用なアセスメントシートであることを示している。

【結語】「最終版」腹痛アセスメントシートは、保健室において「腹痛」を訴えてくる児童生徒に対し、意識的に確実に初期対応における最低限のアセスメントが養護教諭の経験年数また学校種を問わず、等しく児童生徒を「総合」的な視点でアセスメントすることが可能であることが明らかとなった。つまり、発達段階に応じかつ各背景要因も考慮した養護教諭の初期対応における判断・対応を迅速に導く手法として活かされることが確認されたことは新たな知見である。